

Ⅲ-9 京都府立大学生による 湯舟坂プロジェクトの取り組み

吉永 健人

1. はじめに

「湯舟坂2号墳プロジェクト」が2020年に始動して約4年、湯舟坂2号墳をはじめとする須田の文化遺産に対し、発掘当時の記録や記憶の掘り起こし作業から、最新技術による研究など、さまざまな角度からアプローチが進められてきた。筆者を含む京都府立大学文学部考古学研究室の学生も、学生の立場から地域での文化遺産のあり方について考え続けてきた。本稿では、これまでの取り組みを振り返りつつ、学生なりに示してきた文化遺産の「地域資源化」の形を紹介していく。

2. これまでの歩み

本プロジェクトがスタートした2020年、湯舟坂2号墳出土資料の再評価と、石室や遺物の撮影作業をおこなうなど、基礎資料の見直しに着手した（諫早2021）。この年は新型コロナウイルスの感染拡大によって、思うように活動はできなかったが、学生も須田という初めての地で何が出来るかをぼんやりと考えながら、それらの作業を手伝っていた。

プロジェクト2年目となる2021年度は、湯舟坂2号墳の発掘からちょうど40周年となる年で、当研究室も文化遺産の「地域資源化」への作業に本格的に乗り出した（京都府立大学文学部考古学研究室2022）。前年度に新型コロナウイルスの影響で中止となったACTR成果報告会を開催し、発掘当時からの40年を総ざらいする講演・報告がおこなわれた。学生は、栗山雅夫氏（奈良文化財研究所）撮影の高精細写真を用いた写真パネル展を企画し、写真の選定から編集、チラシの作成、さらには会場内での来場者を対象とした人気投票などをおこなった。また、来場者への配布用に、発掘40周年を記念したオリジナルのポストカードを制作した。当年度も新型コロナウイルスの影響により、地域で伝統的におこなわれてきた「古墳祭」は中止となったものの、「古墳慰霊祭」に当研究室も参加し、地域との関係をより密接にすることができた。さらに2月には、老朽化していた須田平野古墳の解説板を新調する作業を地域住民と一緒にこなった。

2022年度には、前年度に引き続きACTR成果報告会や慰霊祭に参加したほか、須田平野古墳の測量調査を実施した（京都府立大学文学部考古学研究室2023a・2023b・2024a）。また調査にあわせて、「つなプロ」（正式名称：次世代と地域文化をつなぐミュージアムプロジェクト）とのコラボ事業として、地元の高龍小学校の子どもたちを対象に地域の文化遺産の魅力発信をおこなった（吉永2023、京都府立大学文学部考古学研究室2024b）。また当年度はポストカードの第2弾にくわえ、須田の古墳群を総覧できる「古墳マップ」、さらには学生がデザインしたクリアファイルやポロシャツといったさまざまなオリジナルグッズを制作した（京都府立大学文学

部考古学研究室 2023b)。

プロジェクト 4 年目となる 2023 年度は、ACTR 成果報告会で恒例の写真パネル展を実施したほか、当研究室の守田悠（当時、博士前期課程 2 年）が発表者の 1 人となるなど、学生が活躍をみせた（守田 2023）。また、前年度の測量調査に引き続き、須田平野古墳の発掘調査を実施し、調査期間には、地域住民との交流として区民向けの説明会を企画し、学生自ら調査成果を直接区民に伝えた。また、前年の「つなプロ」に引き続き、高龍小の子どもたちに向けた出張授業や古墳ツアー、さらには発掘体験を実施した。この年のオリジナルグッズとしては、「解説シート付きオリジナルしおり」と子ども向けの「オリジナル野帳」を制作したほか、発掘調査にあわせて、湯舟坂ポロシャツに新たなカラーを追加した（京都府立大学文学部考古学研究室 2023b・2024b）。



写真1 須田平野古墳解説板制作の様子



写真2 草刈り後の BBQ の様子



写真3 地元向け説明会の様子

3. 「地域の中」で文化遺産を考える

以上で振り返ったように、当研究室では文化遺産の「地域資源化」に向けて、学生の立場から活動が続けてきた。実際に須田へ足を運び、地域の中で活動をおこなうことも多く、その際には地域の方々と交流する機会に恵まれた。

例えば、2021 年度に実施した須田平野古墳の解説板新調作業では、制作から設置までの作業を地域住民の協力のもとでおこなった（写真1）。共同作業の中で聞くことができた地域住民の率直な思いや考えは、学生にとっては大変貴重な現地での「講義」でもあった。ほかにも、これまで地域のもとで続けられてきた湯舟坂2号墳周辺の草刈りにも定期的に学生が参加し、地元の方々とともに作業をおこなってきた。文化遺産を守り伝える日々の作業の大変さを身を以て感じる事ができるし、何よりも草刈り後の BBQ での美味しいお肉やお酒が、より率直な地域の声を引き出してくれる（写真2）。草刈りという、一見文化遺産活用とは直接結びつかないような作業が、文化遺産の「地域資源化」に対するヒントをたくさん与えてくれた。

地域住民とともに歩んできた当プロジェクトだが、とりわけ須田平野古墳の調査は、地域と密接にかかわりながらの取り組みとなっ

た。調査期間中は、須田区公民館を宿舎として利用させていただいたほか、毎日の買いだしや入浴も地元のスーパーや温泉を利用し、時には近隣の方から食材を差し入れていただくなど、まさに地域の中での調査生活だった。そうした地域に成果を還元するべく、区民向けの成果説明会を開催し、学生から調査成果を伝える場を設けた。調査初日に須田区全戸に直接うかがって挨拶と案内をした効果もあり、多くの方々に来ていただけた（写真3）。説明会では、調査成果の説明だけでなく、これまでの本プロジェクトとしての取り組みや、須田での文化遺産活用にかかる学生の率直な思いを伝えた。一方で、参加した地元の方々からも、発掘当時のエピソードや、地元の文化遺産に対する強い思いを聞くことができるなど、さまざまな収穫があった。地元の方々とは膝を突き合わせて話をするすることで、地域の文化遺産を守り伝えてきた住民の並々ならぬ思いを、身を以て感じることができた。

同じ京都府内とはいえ、大学からはやや距離のあるこの地に、われわれ学生は、みなすすんで何度も足を運んだ。それは、地域の文化遺産が持つ魅力以上に、そこに住む人々の温かさに惹かれた部分が大い。そうした地域そのものの魅力こそが、文化遺産を守り伝えるひとつの鍵になると強く思う。

4. 文化遺産を「つくる」—オリジナルグッズの制作—

本プロジェクトの中でも主要なコンテンツとなりつつあるのが「湯舟坂オリジナルグッズ」である。このオリジナルグッズは、2021年度に湯舟坂2号墳の発掘40周年記念としてオリジナルポストカードを制作したのが始まりだった。このポストカードは、プロジェクトの成果である栗山雅夫氏撮影の高精細写真を活用し、学生が中心となって考案、編集して全3種を制作した。栗山写真を効果的に用いるだけでなく、表面（宛名書きの面）には、環頭大刀の外形をトレースしてアイコン風にしたり、大刀の柄に透し彫りされている半月状の模様をアレンジしたりと、考古資料を「二次加工」してデザインした（本書Ⅲ-10: 資料1参照、以下同）。

当初は、正直「いいものを作りたい」という気軽な気持ちで作っていたが、その後さまざまなグッズを作るにあたり、「グッズ」の持つ力や役割を意識するようになった。例えば、2022年度に制作したオリジナルクリアファイルは、栗山氏撮影の写真と、金宇大氏（滋賀県立大学）作成の実測図を組み合わせたインパクトの強いデザインにしたものだが（資料4）、これは考古学に親しみの少ない人の目を引き、関心につなげるのが狙いであった。さらにクリアファイルとして使用されることで、人と文化遺産との距離がぐっと縮まり、文化遺産が親しみやすい存在に生まれ変わるのである。

グッズで人々の心を掴んだ先で、「学び」に繋げることも忘れてはならない。2023年度制作のオリジナルしおりは、コンセプトの異なる全3種をセットとしたが、それらに加え、古墳や遺物、デザインのコンセプトを説明した「解説シート」を同封した（資料7）。これには、単にグッズで文化遺産に興味を持ってもらうだけでなく、その先で「学び」に結びつける狙いがある。小学生をメインターゲットとしたオリジナル野帳も同じく、見返し部分に文化遺産マップやフィールドワークに役立つ情報などを盛り込み、文化遺産でのフィールドワークでは欠かせない「野帳」を身近に感じてもらえるように企図した（資料8）。

ほかにも、学生考案オリジナルポロシャツは現在では多くの人々が各イベントで着用し、プ



写真4 湯舟坂プロジェクトのユニフォーム

に陥らないよう、きちんとメッセージを込めることも重要である。これまでのグッズも、まだまだ試行錯誤しながらの作品ではあるが、湯舟坂2号墳をはじめとした文化遺産の新しい姿として、より多くの人々にアプローチできたのではないだろうか。

プロジェクトのユニフォームとなっている（資料6）。身に纏うことで、外への発信力・宣伝力はもちろん、プロジェクトの紐帯にも繋がる、強力なアイテムである（写真4）。

グッズ化は文化遺産の持つ魅力を何倍にも増幅させることのできる活用方法である。ただし、デザイン力やソフトでの編集スキルも必要となるし、費用も考えなければならない。

そして、グッズ化自体が目的化して自己満足

5. 大学生×小学生の挑戦

2020年度に始まった湯舟坂プロジェクトには、地域住民、研究者、大学関係者など、多くの人々が携わってきた。その中でも、地域の文化遺産を未来に伝える重要なピースとなるのは、次世代である地元の子どもたちである。

当研究室は、2022年・2023年に、地元の小学校である高龍小学校の生徒たちとともに、地元の「お宝」を再発見・発信する取り組みをおこなった。当時実施していた須田平野古墳の測量・発掘調査にあわせて、当学生が直接教室へ出向く出張授業や、湯舟坂2号墳・須田平野古墳をめぐる古墳ツアーを企画した。古墳ツアーの中では調査風景の見学や発掘体験などをプログラムに盛り込んで、小学生が文化遺産を身近に感じてもらえるような機会を設けた。古墳そのものの説明だけでなく、地域で管理をおこなっている「湯舟坂古代の丘公園」を通じて、文化遺産を守り受け継いできた地域住民の思いも一緒に伝えた。

子どもたちとの活動には、ほかの活用メニューにはない難しさがあった。その最初の関門は、子どもたちの興味関心を引き出すことである。子どもにとっては地味に見えてしまう、古墳や遺跡たちを、ロマンあふれる「お宝」に見せる力が試されるのである。そのため、古墳ツアーに先立って実施した出張授業では、一方的に説明をおこなうのではなく、クイズや寸劇を交える（写真5）などの工夫を凝らした。その際には、これまで作ったオリジナルグッズが強力な武器となり、子どもたちの興味を引きつけた。ほかにも、子どもたちに対して古墳や文化遺産を分かりやすく伝えるのも、案外難しい作業である。学問的な内容を子ども向けに「翻訳」し、かつその魅力を伝えるため、授業での資料やシナリオ、古墳ツアーでの企画は、何度も内容の吟味を重ねた。パワフルな小学生をとりまとめるのも簡単ではなく、プロである学校の先生方に大いに助けて頂いた。休み時間にはドッジボールをして男子の剛速球を受けるのも、コミュニケーションの一環であった。

このように、さまざまな難しさもあったが、それ以上に子どもたちの素直さや積極性に助けられた部分も大きかった。特に、子どもたちはこちらの想定以上に地元の文化遺産を知っていて、地元に住む子どもならではの思いを披露してくれた。授業や古墳ツアーの中でおこなった

クイズでは、豊かな発想で鋭い答えが返ってくることもあった。最初は興味を持ってもらえるか心配していたが、むしろ元気すぎる程の子どもたちから、毎日の調査でくたくたになっていた学生が逆に元気と刺激をもらっていた（写真6）。

こうした取り組みによって伝えた文化遺産の魅力は、子どもたち自身を通してさらに広がっていく。2022年のつなプロでの活動では、学習発表の場が設けられ、校内や地域へ、湯舟坂2号墳をはじめとする地域文化の魅力が広く伝えられた（写真7）。これらの成果はパンフレット『高龍 AtoZ』にまとめられたほか、つなプロ公式のYouTubeやHPにもアップロードされ、全世界に須田の文化遺産が発信されている。子どもたち自身が魅力発信の主体となったことの意義は大きく、「つなプロ」の名前の通り、さまざまな人や文化がつながることで、湯舟坂2号墳を核とした輪が大きく広がっている。

これらの取り組みを通して子どもたちに伝えたかったことは、「金銅装双龍環頭大刀」という難しいことばでも、古墳の時期が6世紀のどのあたりかということでもない。いつもの通学路や遊び場の近くに、おもしろい古墳や遺跡が隠れていて、それらは地域の人々が大切に守り伝えてきたということである。子どもたちが大人になったとき、「地元にはすごい古墳がある」と思い出してくれたり、「古墳を掘ったことがある」と自慢話になったりして、少しでもふるさとの誇りになってくれたら成功、そしてそのうちのひとりでも、考古学者や学芸員になってくれたら大成功だろう。

6. おわりに

本プロジェクトは、地域住民はもちろん、大学関係者や各分野の研究者、京丹後市職員など、多くのステークホルダーから成り立っており、それぞれの立場から文化遺産の地域資源化に励んできた。地元住民でもなければ、プロの研究者でもない学生に何ができるのか、常に問い続けながら試行錯誤してきた。その問いは尽きることはないが、多くの大人に助けをもらいながら、その答えを学生なりに提示してきたつもりである。筆者をふくめ、プロジェクトスタート



写真5 出張授業の様子



写真6 古墳ツアーでのクイズの様子



写真7 高龍小学校の生徒たちによる
魅力発信（校内発表会）

時の学生はみな、大学はもとより、本プロジェクトから卒業してしまったが、それぞれのスキルや思いは、才気あふれる後輩たちが受け継いでくれている。

思えば、この須田の地がもつ不思議な力に魅せられた4年間だった。プロジェクトから離れるのはすこし寂しいが、時にはまた同期を呼んで、湯舟坂2号墳が雑草に埋もれてしまわないよう、草刈りの手伝いをしに行こう。

参考文献

- 諫早直人 2021「古墳を地域資源化する―湯舟坂2号墳プロジェクトの挑戦―」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2022「古墳を地域資源化する（2）―湯舟坂2号墳プロジェクトの2021年」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2023a「京丹後市須田平野古墳の調査（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2023b「古墳を地域資源化する（3）―湯舟坂2号墳プロジェクトの2022年」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2024a「京丹後市須田平野古墳の調査（2）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第10号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2024b「古墳を地域資源化する（4）―湯舟坂2号墳プロジェクトの2023年」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第10号 京都府立大学文学部歴史学科
- 守田悠 2023「木棺からみた湯舟坂2号墳」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅲ―湯舟坂2号墳の被葬者像を探る― 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 吉永健人 2023「湯舟坂プロジェクトとつなプロ―世代を超えた文化遺産活用―」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅲ―湯舟坂2号墳の被葬者像を探る― 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

編集 諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2